貝 塚 の 構 造 に つ い て¹⁾

神 尾 明 正²⁾

On the Profiles of Shell-mounds¹⁾

Akimasa KAN・O²⁾

考古学者諸氏が、果してどの程度に貝塚の構造いいかえれば貝塚の成因を理解しているのか、うたがいをもたざるを得ない場面にしばしば遭遇する。時には専門家相手に時には大衆相手に諸氏がおこなう貝塚の臨地講義などをきく機会があると、そういううたがいをもたくなるような発言をきくことが多い。従来の考古学の知識をそのまま素朴に理解して、それを自分の専門に応用しようとする考古学以外のいろいろの専門家達についても、全く同じことがいえる。

現在の千葉女子高である当時の千葉二高生が、千葉市園生町通称長者山にある園生（そのう）貝塚の、環状の北東部分にトレンチを入れるように掘っているのを筆者は 1950 年に見学させてもらって、はじめて貝塚の構造というものを成因的につかむことができ、その発掘を指導していた“千葉市史”編さん中の研究者達に説明を試みたが、納得してもらえなかった。しかし、これがきっかけとなって、筆者の園生貝塚の 1951 年から 1961 年にいたる 11 年間の実験的綿密発掘がはじまったわけである。その成果は、折にふれて考古学協会・地質学会・地理学会などで口頭発表し、またその総まとめは千葉大学文理学部紀要（神尾、1963）に発表したとおりである。

われわれがあとにのべるようなことに気付く前には、大型の環状貝塚や馬蹄形貝塚を残したような大ぜいの人達の住居は、一体どこに存在していたのだろうかということがわかっていなかった。今から考えれば当然のこととはいえ、環状貝塚の中側にも外側にも、住居址が発見されなかったからである。

その後加曽利貝塚の発掘がはじまり、考古学協会内に特別委員会ができ、15 名の委員には拙稿（神尾、1963）を御叱正いただいてあるはずである。

貝塚では、放棄された縦穴住居址内に貝殻その他がすてられ、縦穴は埋められてゆき、その縦穴が埋められおわると、その縦穴が掘られた時とはちがう地形面すなわち生活面ができ、その面から新しい縦穴が掘られ、再び同じことがくりかえされて、また新しい地形面ができ、また新しい縦穴が掘られ、また埋まり、また別の地形面ができ、また新しい縦穴が掘られということがくりかえされてきた。そして弥生式に影響されることのない縄文プロパーから、ごく近い江戸時代まで、縦穴住居に住み、縄文土器を使い、放棄した縦穴に貝殻その他用のすんだものを棄て、貝塚を形成するような生活をつづけていたのが、日本歴史の本筋であると考えられるにいたった。そのことは、沖積地質学的仮編年表（神尾・森谷、1972）だけではなく、台地上沖積地史模式断面図（神尾、1974）でも説明できるようになった。

最近にいたり、早・慶・明の合作で、“加曽利南貝塚”（瀧口ほか、1976）・“加曽利北貝塚”（瀧口ほか、1977）の両報告書が刊行されたことは、斯学のために御同慶の至りである。しかし、両報告書をみると、現象としてつかめた貝塚の断面あるいは断面図に対して、かならずしも合理的な解釈を加えているとはいいいきれない。両報告書のトレンチ断面図の解釈をみると、ヤロあるいはカロにくいこんで掘られている縦穴だけしか、縦穴とみとめていない。そういう部分だけ太い線であらわし、図の下欄外に縦穴の番号をつけている。両報告書の随所に出てくるけれど、例えば“南貝塚”、p.70 第Ⅱトレンチ 4 区 44-71~75 (p. 92 にも同じ部分が出ている) 付近、筆者にはここにある第 16 号縦穴の上に、少なくとも 2 個分の縦穴が重なってみえる。“北貝塚”おりこみ第 18 図向かって右下第 46 号住居址付近、筆者にはこの住居址直上になお数個分の縦穴住居址がみとめられる。

1) 1978 年 9 月 15 日受付

2) 千葉大学 Chiba University

園生貝塚 1960 年第Ⅱトレンチの一部の略断面図——1・2・3 は黒土、太いローマ字は縦穴住居址の位置、無印のレンズの断面様のものが貝層

筆者はかねてから、なぜこの断面の一部を縦穴とみとめるかという根拠を簡単に示すために、“縦穴表現型式” (神尾, 1963 : p. 84-85) というものを考えて、断面図で縦穴とみとめられるものに対してその根拠を示して来たので、一読して御叱正いただきたい。

付図は前出拙稿 (神尾, 1963) にある数枚ある断面図の一つのまたその一部であるが、縦穴住居址が重なって厚い貝層となっていることがよくわかると思う。ローマ字が記入してあるところは、縦穴とみとめられる。縦穴が埋まってゆく過程で、縦穴の各部分が人為的自然的に変形されてゆくので、このような顕著でない形となって残っているわけである。このような貝塚の構造を知っていれば、少なくとも層位法で貝塚を掘って考えることは無理であり、厳密なトレンチ法によるしかほかに方法のないことがよくわかるはずである。貝のサンプリングをする場合にも、貝塚断面にみられるどの“レンズ”中から採集したかということが、きわめて重要であることがわかるであろう。

一般に、貝塚に関する研究発表の折に、発表者に対して、こういう貝塚の構造などわかっていますねと念を押すと、十分承知しているような答えが返ってくるけれども、もしわかっていたら、一番底だけしか掘らない“全面発掘”とか、一番底だけしか縦穴とみとめないような報告書はでて来ないはずである。

以上、貝塚の構造や形成過程を再認識していただきたいという小さい卒直な願望をもって、コメントに代えさせていただく。

ここにいたるまでに、実にお名前をあげきれない大ぜいの皆様のお世話になった。その想い出はつきるところを知らない。付記して深謝の意を表する次第である。

引用文献

- 神尾明正 (1963) 園生 (そのう) 貝塚の発掘による地形面とその考察. 千葉大学文理学部紀要, **4-1**, p. 79-101, 断面図 7.
- 神尾明正・森谷ひろみ (1972) 沖積地質学的仮編年表の修正. 千葉大学教養部研究報告, **B-5**, p. 25-27, 断面図 1.
- 神尾明正 (1974) 沖積層の断面に見られる房総の歴史. 千葉県歴史, **8**, p. 1-8.
- 滝口 宏ほか (1976) 加曾利南貝塚. 228 p.
- 滝口 宏ほか (1977) 加曾利北貝塚. 222 p.